なぜあのキャラは死ななければならなかったのか？

名作の「死」の描写で辿るマンガ・アニメ史

浦澄 彬 著
Akira Urazumi

Forest
2545
Shinsyo

まえがき

キャラクターの「死」をファンの力でなかったことにする、という嘘のような話があった。アニメやマンガに先立つこと数十年前、20世紀初頭の英国、ロンドンの名探偵が、熱心なファンの力で生き返った。

言わずと知れた、名探偵シャーロック・ホームズである。世界中で一番有名な英国人であるホームズ（もちろん架空の人物だが）は、「最後の事件」で一度は死んだのだが、その死をファンは許さなかった。作者のコナン・ドイルは、ホームズを死なせてこのシリーズを終わらせたつもりだったのだが、熱烈なファンの声に負けて、ついに彼を生き返らせた。正しくは、死んでなかったということにして、シリーズを再開したのだ。

このように、あるキャラクターが多くのファンに愛されていて死んでも死なないという例が、20世紀初めにはすでにあった。やがて日本でマンガやアニメが発達する

と、物語中のキャラクターの死が社会問題になったり、ファンの求めによって死ななかったことになったりする。

だが、ちょっと待ってほしい。キャラクターの「死」とは、もちろん現実のことではなく、物語中の「死」なのだ。いくら熱心なファンとはいえ、キャラクターの生死がそこまで重大な問題になるというのは、どういうことなのだろう？

実際にアニメやマンガのキャラクターの死が、ファンにだけでなく世間でも広く知られたり、重要な意味を持ったりすることが繰り返されている。

例えば、昭和の人気ボクシング作品『あしたのジョー』（原作：高森朝雄、漫画：ちばてつや、１９６８年連載開始）で、主人公の矢吹丈よりファンが多かったとされる、ライバルの力石徹の場合だ。力石はジョーとの宿命の対決試合で激闘の末勝利した直後、試合中にジョーのパンチが原因で受けたダメージのせいで、突然死んでしまった。ところがなんと、マンガのキャラクターなのに、その死を悼んだファンや当時の文化人が企画して、力石徹というマンガキャラクターの葬儀が現実に行なわれたのだ。

また、主人公のジョーも、マンガ最終巻のラストシーンで世界チャンピオンに挑んだ試合の直後、「燃えたよ…まっ白に…燃えつきた…まっ白な灰に……」の名セリフとともに、まるで死んでしまったかのような描写となっている。このジョーのラストは、はたして彼が死んだのか生きているのか不明なまま余韻を残したため、今でも読者やアニメ視聴者の間で議論が決着していない。

さらに、同じく昭和を代表する作品の1つ『北斗の拳』（原作：武論尊、作画：原哲夫、1983年連載開始）の主要キャラクターであるラオウも、その死が長く語り継がれている。主人公ケンシロウとの激闘の末に自死する際のセリフ、「我が生涯に一片の悔いなし!!」は、死に様の言葉としてネタに使われるほど、広く知られている。『北斗の拳』を読んだり視聴したことがなくても、このセリフは知っている、という人は少なくないだろう。

このように、実在の人物の生死が社会的に意味を持つのと同じように、物語のキャラクターの死を悲しんだり、その死の意味を考えて論じたりするのはなぜだろうか？　キャラクターの死は、現実に生きている私たちにとって、大切な何かの代理だ

と言えるかもしれない。アニメやマンガのキャラクターの死を取り上げて意味を探り、架空の人物の生死が私たちの心をなぜ揺り動かすのか、本書で掘り下げて考えていく。

まず第1章で、二〇世紀の名作アニメを中心にキャラクターの死の描写を紹介する。第2章では逆に、近年の〝死を描かない〟人気作品の例（具体的には京都アニメーションの人気作品）を掘り下げて考える。第3章では、社会現象となったキャラクターの死について、前述の『あしたのジョー』や『タッチ』などを取り上げて深掘りしてみる。さらに第4、5章では、時代が変化するにつれてそのキャラクターの死生観も変わってきていることについて、令和以降の作品を紹介しつつ考察していく。

目次

なぜあのキャラは死ななければならなかったのか？

名作の「死」の描写で辿るマンガ・アニメ史

まえがき　3

第1章　二〇世紀の名作アニメに描かれたキャラクターの死

1 『フランダースの犬』『ルパン三世』ほか サブキャラクターの人気獲得と死亡回の増加

●死を描かなかった70年代以前の子ども向けアニメ　16
●世代を超えて愛されてきたアニメの本当の姿　19
●サブキャラクターの台頭と女性ファンの獲得　22

2 『海のトリトン』『宇宙戦艦ヤマト』 最終回大量死の衝撃とリアルな死の描写

●「皆殺し」の異名をとる人物の原点　25
●賛否両論語られるキャラクターの死の美化　28

3 『機動戦士ガンダム』『伝説巨神イデオン』ほか 死の描写や性描写が過激化した80年代

●波及する過激描写と茶の間の反応 32
●富野アニメだからできた衝撃的な残虐描写 35
●原作の残虐さを忠実に再現した名作アニメ 36
●オタクが白い目で見られるようになった理由 37

第2章 死を描かない京アニ作品から死を辿る

1 死を描かない京アニ大ヒット作品と『ひぐらしのなく頃に』『東のエデン』ほか深夜裏アニメ

●なぜ京アニは死を描かなかったのか？ 42
●垣間見える京アニ制作姿勢の異質さ 43
●数々の伝説を残したアニメ作品の登場 47
●リアルな生死の問題が強く表現された年 49

2 平成中期の京アニ作品と『Angel Beats!』ほか深夜裏アニメで描かれた死

●ゼロ年代アニメが辿り着いた最終進化形 54
●大災害に襲われた日本人がアニメに求めたもの 56
●大人向けアニメの増加と京アニ作品の方向転換 59
●時代の流行に乗り始めた作品選び 62

3 『涼宮ハルヒの憂鬱』『らき☆すた』『けいおん!』ほか 代表作から深掘りする京アニの死生観

●京アニのアニメ化企画の特徴　65
●深刻さを排除する徹底した作品作り　68
●家族よりも友人、恋愛よりも友情　69
●日本アニメにおける音楽表現の最高峰　71

4 『氷菓』『Another』ほか 平成ミステリーアニメから見える死生観

●運命に導かれた2つの「自社製作」会社　73
●制作者が作品を選び、作品もまた制作者を選ぶ　75
●死者ゼロ作品を生んだキャラクターの保守性　77
●「涼宮ハルヒ」と「千反田える」の共通点　79
●誰も不幸にしないという作者の意志　80
●死の影を消す守られた世界での青春　82
●京アニの死生観が強く現れた劇場アニメ作品　84
●対照的に死を受け入れた劇場アニメ作品　86
●知らぬ間に変えられている視聴者の死生観　87

第3章 社会現象としてのキャラクターの生き様と死に様

1 『あしたのジョー』 力石徹の葬儀と矢吹丈のラストシーンの謎

●前代未聞のキャラクターのリアル葬儀　90
●男は戦いのために生き、死んでも勝つもの　94

2 『宇宙戦艦ヤマト』語り継がれる沖田艦長の死に際の名セリフ

●新旧世代の交代を秀逸に描いた名シーン 97
●普遍的な存在感を放ったアニメ史に残るキャラクターの最期 100

3 『タッチ』和也の突然死と達也が残した名セリフ

●これまでになかった悲劇の表現 102
●死んでしまったヒーローには誰も勝てない 104
●三角関係の構図が印象付ける死の重み 106

4 『北斗の拳』ラオウの自死と死に際の名セリフ

●名セリフを多数生んだアクション作品の金字塔 108
●戦いに敗れ死してもなお信じるものは己のみ 110

5 『機動戦士Vガンダム』深刻な死生観を思わせた唯一無二のガンダム作品

●ガンダム史上最も過酷な運命を背負わされた少年 112
●90年代の終末観に影響を受けた救いのない死 114
●人類抹殺のアイデアは偶然か必然か 116

6 『新世紀エヴァンゲリオン』綾波レイの死と復活がもたらしたもの

●制作陣が心を壊すほどの衝撃の傑作、あるいは問題作 118
●死の重みが軽んじられていったきっかけ 121
●平成アニメの典型を作った時間SF 122

第4章 死んでも蘇るキャラクターから見る平成アニメの死生観

1 『ロードス島戦記』『スレイヤーズ』ほか 繰り返し可能なゲーム的死生観

●和製ファンタジーの元祖となった名作 126
●日本に「ファンタジー」が浸透したきっかけ 128
●暗黙の了解を打ち破った作品の登場 131

2 『美少女戦士セーラームーン』ほか 現代美少女キャラを生んだ戦闘美少女&魔法少女

●一度きりの生を必死に生きたいと願った少女たち 134
●異質なオーラを放つ昭和の女性戦士たち 135
●戦闘美少女独特の存在感はどこから放たれているのか? 138
●当たり前に死を恐れ命を愛しむ少女像 140

3 『GANTZ』『魔法少女まどか☆マギカ』ほか 生き返りとタイムリーパーたち

●時代の終末待望気分が生んだ儚い名作 143
●青春のリアルを追求したタイムリープ作品の金字塔 147
●超常ヒロインも「今しかできない」を求めている 150
●世界を再創造するちゃぶ台返しのラスト 154
●まるで没入型蘇りデスゲーム作品 145
●視聴者も時間ループし続けた8週間 148
●王道タイムリープ作品に見る複数の世界線 152

4 『コードギアス反逆のルルーシュ』『革命機ヴァルヴレイヴ』ほか 不可逆的に流れる時間の終焉

●「時」は必ず終わるという現実を受け入れた3作 157
●日本人が好んでしまう英雄叙事詩的な物語 161
●あえてのカオスさが視聴者に親近感を与える 159
●多様性と文明の進化が見え隠れする異色作 162

5 『グリッドマン ユニバース』 マルチバースの世界で見るアニメ

●怪獣・特撮アニメの最先端 164
●マルチバース的作品が若者の共感を集める理由 166

第5章 平成・令和のキャラクターに学ぶこれからの生き方

1 『響け！ユーフォニアム』ほか 音楽系アニメから辿る死生観の変化

●時代とともに変わりゆく若年層の死生観 170
●ゼロ年代的な平穏無事な日常とは？ 172
●部活アニメにリアリティを生み出す難しさ 174
●スポ根魂がキャラクターから死を遠ざける 176
●「リアリティ」の意味合いが変わった音楽アニメ 179
●死が身近にある物語ほど親和性の高い音楽 181
●死がテーマの曲に共通するある形式 183
●音楽アニメと音楽もあるアニメ 185
●リアルな社会問題が死を浮き彫りにする 188

2 「異世界転生」関連作品ほか 二次創作の普及とゲーム化されていくキャラクターの死

●同じキャラクターなのに生死が異なる不思議な現象 191
●さまざまなジャンルで広がる革命的な展開 193
●マルチバース化最大の産物「異世界転生」作品 195
●必然的なキャラクターの死も生き返らせることができる時代 197

3 『進撃の巨人』『鬼滅の刃』『君の名は。』ほか 令和に生きる人々の死生観

●世界は「人間原理」でいかようにも変わる 199
●なぜ人々は「鬼殺し」に魅了されたのか？ 202

●世界的に注目された震災3部作 204
●生き生きと描かれた脇役キャラクターの力 208
●現代人は「夢物語」を求めている？ 211
●20世紀と21世紀の大人のあり方の違い 206
●彼女を救うか、世界を救うか？ 209

4 『ソードアート・オンライン』『チェンソーマン』ほか 王道メタバース作品と先祖返りの謎

●メタバース作品の過去・現在・未来 213
●死生観は普遍性を保ち続ける 218
●令和の大ヒット作品で描かれる奇妙な先祖返り 222
●世界市場売り上げベスト3の日本ラノベの共通点 216
●現代人の精神的疲労を体現する非人間的なキャラクターの生き様 220

あとがき 225

装丁・本文デザイン／bookwall
装画／加藤宗一郎
図版デザイン／二神さやか
校正／永田和恵（株式会社 剣筆舎）
DTP／株式会社キャップス

第1章

二〇世紀の名作アニメに描かれたキャラクターの死

1 『フランダースの犬』『ルパン三世』ほか サブキャラクターの人気獲得と死亡回の増加

死を描かなかった70年代以前の子ども向けアニメ

日本のアニメ作品で、キャラクターの死ぬ場面はもちろん物語の必要上、昔から描かれていた。しかし、１９６０年代までのテレビアニメは、主に子ども向け番組という位置付けだったため、人の死はなるべく描かれない傾向にあったのは間違いない。現在のＲ15＋指定などのレイティングシステムとは違って、業界内の不文律だったのだろうが、当時のテレビアニメでは死の描写はかなりまれだった。

ところが70年代に入ると、テレビアニメ制作者側の意識が変わったためだろうか、主に子どもが観る時間帯のアニメでも、キャラの死をあえてリアルに演出する作品が現れてくる。

キャラの死ぬ場面が重要な位置付けにあるテレビアニメで、70年代のものというと

©NIPPON ANIMATION CO., LTD.

すぐに思い浮かぶのは、1975年放送の『フランダースの犬』[*1]だ。これは日本アニメーション制作の「世界名作劇場」シリーズの第1作である。

主人公の少年ネロが生活困窮の結果、死んで昇天するのだが、「パトラッシュ、疲れたろう。僕も疲れたんだ。なんだか、とても眠いんだ」の名セリフが、今でも昭和アニメの名場面でよく取り上げられる。

ただ、制作時期が75年ではあるが、子ども向けのアニメシリーズであるため、あえてキャラクターの死を生々しく描くことは避けている。ネロ少年が

＊1
原作：ウィーダ
《1839年、英国に生まれた。本名は、Marie Louise de la Ramee という。20歳の頃、「ウィーダ」というペンネームで小説の執筆を始める。1872年に、『フランダースの犬』を完成。『子供のための物語集』など約40編の小説を著した。フィレンツェに定住し、近くのビアレギオで1908年に亡くなった》（参考：新潮社HP・著者プロフィールより）

念願のルーベンスの絵を見ながら死ぬと、天使たちが出迎えて、まるでハッピーエンドであるかのように少年が昇天するのだ。

このように『フランダースの犬』は例外的に主人公が死ぬが、シリーズの他の作品、『アルプスの少女ハイジ』、『母をたずねて三千里』や『あらいぐまラスカル』など、ほとんど死が描かれないものが多い。

世界名作劇場のシリーズは、のちに有名になっていくアニメ監督の宮崎駿と高畑勲の出世作としても重要だ。この当時のテレビアニメが、子どもの視聴を目的とした作りなのは最初から決まっており、さすがの宮崎駿や高畑勲でも、物語の中の死はなるべく避けるしかなかったのだろう。

60年代当時、テレビアニメで子どもに人気の作品と言えば、『鉄腕アトム』などの手塚治虫の虫プロダクション作品や、『エイトマン』、『鉄人28号』などのメカアクションものだった。これら以外ではマンガ原作もの、『サザエさん』や藤子不二雄の『オバケのQ太郎』がある。『巨人の星』などのスポーツマンガのアニメ化でも、キャラクターの死は描かれにくい傾向だった。

それが変化してくるのは70年代以降、テレビアニメでもシリアスなドラマやＳＦ、リアルな物語を指向するようになってからのことである。テレビアニメが現実指向になるのと並行して、アニメ視聴者が子ども中心から、10代～20代の青少年・女性へと拡大していった。

この流れは、どちらが先とも言いがたく、おそらくは同時に進行していったのだと考えられる。子どもの頃にテレビアニメを観た世代が、10代～20代になっていくにしたがって、そのままアニメを愛好し続けたという結果なのかもしれない。

特定のアニメ作品にファンクラブ（米国ＳＦ作品の例にならって「ファンジン」と呼ぶ場合も）ができてくるのもこの時期であり、またアニメの男性キャラクターに女性ファンがついてきたのも同時期のことだと言える。

世代を超えて愛されてきたアニメの本当の姿

１９７０年代以降のテレビアニメには、21世紀の今でも人気が続いている伝説的な作品がいくつも出現した。

『ルパン三世』もその1つであり、今となってはテレビシリーズ第1作（1971年～）を知らない世代も、それぞれの時代の『ルパン三世』を楽しんでいる。ルパンや銭形警部など、主要キャラを演じた声優も亡くなったために交代があり、世代を超えた作品の1つと言えるだろう。

物語は単純なもので、フランスの怪盗アルセーヌ・ルパン（架空の人物で、フランスの作家モーリス・ルブランの小説の主人公）の孫であるルパン三世が、相棒のガンマン・次元大介、居合抜きの達人・石川五ェ門、謎の美女・峰不二子らと泥棒家業に励んでいる。ルパンを宿敵と狙う警視庁の銭形警部は、ルパン逮捕に執念を燃やすが、毎回、裏をかかれて逃げられる。このパターンをさまざまなバリエーションで、コミカルな演出とスピード感あるアクション描写で繰り返すのだ。

原作のモンキー・パンチのマンガでは、『漫画アクション』という大人向け雑誌に連載されたアクションハードボイルドであった。これをアニメ化するにあたり、当時のスタッフたちは本格的な大人向けのアニメ作品として作ろうとしていた。しかし、本作が挑んだ本格ハードボイルドのアニメには、まだ時代が追いつかなかったよう

＊2
《宮崎駿　いよいよ『ルパン』の放映が始まった。（中略）すさまじい視聴率を誇っていた『巨人の星』の後番組として、期待されていましたから。9％は波紋を呼びまして、路線がまちがっているとか、（中略）そのおはちが、ぼくとパクさん（高畑勲）にまわってきたというのが、そもそもの『ルパン』とぼくとの結びつきの最初だったんです。（中略）視聴率を上げる、これが第1目標ですよ。（中略）そのうち、キャラクターが最初のころとちがってきたんです

で、視聴率が振るわなかった。そこでシリーズの後半は、コメディタッチの娯楽アニメ風に作風が大きく変わった。その辺りの事情は、若き日に本作を途中から担当した宮崎駿のインタビュー[*2]に詳しい。

『ルパン三世』2作目のテレビアニメ（1977年～）では、コミカルさを引き継いで、さらにドタバタ風味の強いコメディアクションの作品になっていった。それでも長い放送期間の中では、ハードボイルドタッチのエピソードが何話もあった。ちなみに、同作26話や58話など、相棒の次元大介が活躍する回も増えた。

今となっては1作目も2作目も、評価の高いエピソードはハードボイルド調のものが多い。時代がようやく第1作の最初の作品に追いついたということだろう。そういったハードボイルド調のエピソードでは、容赦なく人が殺されたりもしていた。

ルパン三世自身も当初の設定では、殺しの世界チャンピオンとして自他ともに認められるような、殺し屋としての一面を持っていた。ルパン愛用の拳銃ワルサーP38も、シリーズ前半では何人も命を奪っている。

本作の元ネタであるフランスの代表的なヒーロー「怪盗ルパン」は、よく知られて

が、みんなわかるかなア。（中略）最初のルパンは、金持ちの3代目が、ヒマをもてあまし、倦怠感を漂わせていたのが、ぼくらが描くようになって、ルパンはイタリア系の貧乏人で、次元といつもスカンピンの状態で、なにかオモシロイことないかなと（後略）》

《ロマンアルバム　映画「風の谷のナウシカ」GUIDE BOOK》復刻版　徳間書店2010年　P.149～150より）

いるように、殺しをやらない「紳士強盗」であることが売りだった。その架空の怪盗ルパンの孫だという設定で作られたアニメ「ルパン三世」シリーズは、キャラクターたちの個性的な魅力が物語を牽引する。主役のルパンと相棒の次元大介、仲間の石川五ェ門と峰不二子、敵役の銭形警部の5人は、1作目から今に至るまで、ずっと変わらずデフォルトの関係性を保ちながら、コミカルに描かれる日常の中で時にはハードボイルド調になりつつ、さまざまな活躍を繰り広げている。

サブキャラクターの台頭と女性ファンの獲得

次に、テレビアニメ『科学忍者隊ガッチャマン』（1972年～）だが、タツノコプロの代表作シリーズとして今も根強い人気がある。

物語は、謎の秘密結社ギャラクターが世界征服の陰謀を企むことから始まる。それに対抗するべく、南部博士は5人の少年少女を集めてサイボーグ化し、「科学忍者隊」と名付けた。

第1作の主要キャラクターでは「G2号＝コンドルのジョー」が、特に女子にも絶

大な人気を誇った。第1作のラストとなる第１０５話の「地球消滅！０００２」で、ジョーは地球を守るために身を犠牲にする。その最期が、女性ファンの紅涙を絞った。

その最終話で、科学忍者隊はギャラクターの地球消滅作戦を止めるべく、本部へと突入する。前回で捕われの身となったジョーは、最後の力を振り絞って羽根手裏剣を投げるが、敵幹部のベルク・カッツェを仕留められない。ところが、その羽根手裏剣はギャラクターの最終兵器の機械部に挟まり、ギリギリのところで地球壊滅の破壊兵器をストップさせた。そうしてジョーは仲間に囲まれて死んでいく。

当時のテレビアニメのキャラクターでは、女性ファンがついたこと自体珍しい。主人公「Ｇ1号＝大鷲の健」よりも、ジョーは人気が高い。そもそも物語のラストで、主人公を差し置いて決定的な活躍をするサブキャラクターもジョーが初めての例かもしれない。

『科学忍者隊ガッチャマン』はＳＦアクション作品として、かなり真面目に作られており、キャラクターたちもたびたび生命の危機に陥る。キャラクターの死が描かれる

場面でもう1つ印象的なのは、主人公・健の父親であることを隠していた「レッドインパルス」が、命を捨てて息子の健を助けるエピソードだ。

第53話「さらばレッドインパルス」で、健とレッドインパルスは、地球崩壊が迫る中、命がけで敵兵器を止めようとする。ギリギリの土壇場で、レッドインパルスは息子をかばって自分だけ命を落とすことになる。

『ルパン三世』と『科学忍者隊ガッチャマン』の共通点は、キャラクターの死という点もそうだが、主人公よりもむしろサブキャラクターのほうに奇妙に人気が出てファンがついていることが挙げられる。

『ルパン三世』の主役ルパンももちろん人気だが、峰不二子や次元大介、石川五ヱ門などもそれぞれに人気がある。宿敵の銭形警部もファンに愛されるキャラクターなのだ。

『科学忍者隊ガッチャマン』の場合も、主役の健よりもジョーに人気が集まり、また紅一点の「白鳥のジュン」もアイドル的な扱いを受けた。さらに、当時の勧善懲悪路

線のアクションアニメとしてはめずらしく、敵の組織「ギャラクター」の幹部であるベルク・カッツェの特異な存在感も、秘められた過去のエピソードなどと相まって人気があったと言える。

2 『海のトリトン』『宇宙戦艦ヤマト』最終回大量死の衝撃とリアルな死の描写

「皆殺し」の異名をとる人物の原点

『機動戦士ガンダム』の生みの親として有名なアニメ監督・作家の富野由悠季は、若い頃にテレビアニメ『海のトリトン』のチーフディレクターとして参加している。[*3] この作品は手塚治虫のマンガ原作を使って、のちに『宇宙戦艦ヤマト』のプロデューサーとなる西崎義展が製作した。手塚の原作とは大きく異なる展開となっているが、大筋は海洋SFと古代史ロマンを合わせたようなもので、カルト的作品として今も人気

＊3 当時は本名の富野喜幸で活動。1982年以降に富野由悠季名義で活動するようになる。

が根強い。

物語は、緑の髪の少年トリトンが赤ん坊の時に浜辺で老人に拾われるところから始まる。トリトンは大海を治めたアトランティス人のトリトン族最後の生き残りだった。やがてイルカから自分の真実を聞かされたトリトンは、海を荒らすポセイドン族と戦う決心をする。

１９７２年、本作の熱心なファンによって作品のファンクラブ（ファンジン）「TRITON」が作られたのが、日本初のテレビアニメのファンクラブだという説もある。トリトンの声優・塩屋翼を目当てに、録音スタジオに10代の女子が集まってくるという現象まで起きていたらしい。さらに、本放送が終了してからも、文京公会堂にてファンクラブ大会が行なわれ、一説には１０００人ものファンが集結していたという。

また余談だが、テレビアニメ『海のトリトン』の主題歌は、甲子園球場の高校野球で各校吹奏楽部が演奏する、定番応援曲の1つとなっているほどだ。

『海のトリトン』にかかわったのち、富野由悠季はアニメ会社サンライズ（当時は

© 手塚プロ／東北新社

「日本サンライズ」）の中心人物となり、カリスマ的アニメ監督になっていくが、その原点は『海のトリトン』にあると言っていいだろう。

というのも、本作の最終話には驚愕（きょうがく）のどんでん返しがあるのだ。古代アトランティス文明の子孫であるトリトン族とポセイドン族は、海中人類同士で戦いを続けてきたが、最終話で主人公のトリトン少年は、ポセイドン族の人々を結果的に皆殺しにしてしまうという展開なのだ。これは手塚の原作とは違い、富野[*4]のオリジナルだという。

意図せずして大量虐殺をしてしまっ

＊4
《Q「最終回のポセイドンのオチというか落としは、どなたのアイデアなのですか？」富野「あれは僕です。あの落としどころだけは、1クール終わった時点ぐらいで思いついていたんですけど、誰にも言いませんでした。だから26話のシナリオは僕が書いているんです」》（『キネマ旬報ムック　富野由悠季全仕事』監修　富野由悠季　キネマ旬報社　1999年　P.64より）

たトリトンは、それでも戦いをやめずにポセイドン族を倒し、最後はトリトン族の生き残りである少女ピピとカップルになり、新たな世界へ旅立っていくことになる。

このラストの展開は、のちに「皆殺しの富野」と異名をとる彼の原点ではないかと考えられるのだ。「皆殺し」とは穏やかでない通称だが、富野アニメの代表作では、よくキャラクターたちが死ぬ。しかも、主要なキャラクターがどんどん死んでいくことから、その呼び名が付いたという。

70年代テレビアニメの金字塔である『海のトリトン』は、一見すると子ども向け作品っぽい絵柄なのに、キャラクターが次々と死ぬ描写がある。この流れは、同作プロデューサーだった西崎義展のテレビアニメ『宇宙戦艦ヤマト』へ引き継がれていく。

賛否両論語られるキャラクターの死の美化

『宇宙戦艦ヤマト』は今でこそ日本アニメを代表するシリーズだが、第1作の時には裏番組のアニメ『アルプス[*5]の少女ハイジ』の人気に全く及ばず、視聴率低迷で最後は打ち切りのような形になった。

＊5
原作はスイスの作家ヨハンナ・シュピリ（スピリ）の『ハイジ』。1974年にテレビアニメ放送開始。視聴率20％以上という驚異的な反響を巻き起こした。（アルプスの少女ハイジ公式ホームページより）

ところがその後、熱心なファンの声がスポンサーを動かし、再放送から映画化へと人気が盛り上がっていく。この劇場版の公開時には、ファンが徹夜で劇場の周囲に並び、その熱気がのちのアニメブームの火付け役となった。

ここで、第1作のあらすじを簡単にまとめてみよう。

西暦２１９９年、地球人類は絶滅の危機に瀕（ひん）していた。地球侵略を企てるガミラス星人の遊星爆弾が地上に降り注ぎ、人類はその住居地を地下に求めていた。しかし地下にも放射能汚染は容赦なく進み、人類滅亡まであと1年と迫っていた。

そんな時、地球から14万8千光年の彼方にあるイスカンダル星から、メッセージが届く。イスカンダルには放射能除去装置があり、それを取りに来いというのだ。いっしょに送られてきた未知のエネルギー・波動エンジンの設計図を基に、沈没した戦艦大和を宇宙戦艦ヤマトとして改造する。生き残った人類の中から、古代進や森雪など、選び抜かれた若者たちが歴戦の勇士・沖田十三艦長に率いられてイスカンダルに向かうこととなる。

その行手を阻止しようとするガミラス星、総統のデスラーは次々に攻撃の手を差し向ける。ガミラス艦隊との決戦に勝利したヤマトだが、あと一歩のところまで来て、ガミラスとイスカンダルが二連星であることを知る。イスカンダルへ行くには、ガミラスをどうしても通らなければならない。

ヤマト最後の戦いにおいて、旅の途中で病に倒れた沖田艦長の作戦指導で、ガミラス星という1つの星を滅亡に追い込む。イスカンダルに着いたヤマトは放射能除去装置を積み、ワープで帰路を急ぐ。やがて、母なる地球がヤマトの前に現れた。古代たちが喜び合うのをよそに、沖田艦長は静かに息を引き取った。

この西崎作品『宇宙戦艦ヤマト』の第1作では、前述したアニメ『海のトリトン』の場合に似て、最後は敵のガミラス星人を皆殺しにしてしまうという衝撃の結末だった。主人公の古代進とヒロインの森雪が、生き残った地球人類を代表するカップルという形で、地球が救われる展開となるのも『海のトリトン』と同じパターンだ。主人公の男女を一族のアダムとイブとして、象徴的に描いている。

しかも地球人類のカップルだけでなく、地球を救う手助けをしてくれたイスカンダル星の新しいアダムとイブとして、死んだと思われていた主人公の兄・古代守がイスカンダルの女王スターシャの相方になるのだ。両方の星に新カップルを据えて、テーマをもっとわかりやすく描いている。

このように『宇宙戦艦ヤマト』は、テーマとして『海のトリトン』を発展させた作品だと言えるのだが、続編の映画『さらば宇宙戦艦ヤマト 愛の戦士たち』（1978年）は、第1作とはまるで異なる作風となった。主要キャラクターの多くが、戦いの中で死んでいく衝撃的な展開である。映画の最後は、前作でせっかく地球のアダムとイブになったはずの古代進と森雪が、敵に特攻して死ぬ（雪は先に死んでいるのだが）という結末なのだ。

さすがにこの特攻のラストに対しては、軍国主義とか玉砕賛美であるなどと批判の声が上がった。そのせいだろうか、この劇場映画をテレビアニメに作り変えたテレビ版の続編『宇宙戦艦ヤマト2』（1978年～）では、ほぼ同じストーリーなのに、ぎりぎりのところで特攻を回避するラストになっている。それでも、その後のシリー

ズにおいても、キャラクターの死が美化されて描かれるという特徴はずっと引き継がれていくこととなる。

3 『機動戦士ガンダム』『伝説巨神イデオン』ほか 死の描写や性描写が過激化した80年代

波及する過激描写と茶の間の反応

アニメブームは、１９８０年代に入ってますます盛んになった。テレビアニメや劇場アニメ映画のメインターゲットが、かつての児童年齢から青少年世代へ上がっていくのに応じて、物語も場面描写もさらに過激になっていく。

今の時点から振り返ると、当時はまだ映像作品のＲ15＋などの過激描写規制や年齢制限が甘かったせいで、その後のアニメ作品よりずっと過激な描写が平気で夕方やゴールデンタイムにテレビで流れていたことに驚かされる。１９８８〜１９８９年に起

きた「宮崎勤事件」[※6]をきっかけとして、アニメファンへの偏見がひどくなる以前、アニメ視聴者は過激な描写をテレビ放送で当たり前に享受できる時代だった。

暴力描写について、例を挙げてみよう。まず、前述の富野由悠季の代表作『機動戦士ガンダム』シリーズである。テレビアニメ『機動戦士ガンダム』（1979年～）は、富野由悠季監督作品の第1作以来、さまざまに派生作品を生み出しながら、今に至るまで長年シリーズが続いており、アニメ史に残る名作だ。

主人公のアムロ・レイ少年は、たまたま戦争に巻き込まれて、人型兵器のモビルスーツ「ガンダム」のパイロットとなる。主要な敵役であるジオン公国のシャア少佐との度重なる対決を経て、アムロは一人前の兵士に成長していく。当初は表に出ていなかった「ニュータイプ」という人類の進化の概念が、後半には主要テーマとなり、アムロは「ニュータイプ」として人類進化の目覚めを体験していく。

壮大な物語の続きを予感させながら、しかしテレビアニメとしては視聴率が振るわず、物語は途中打ち切りのような形で終わる。けれど、前述の『宇宙戦艦ヤマト』と

＊6　連続幼女誘拐殺人事件。犯人の宮崎勤は1989年8月に逮捕された。

同じく熱心なファンがスポンサーを動かして再放送されるとともに人気が高まり、ついにテレビアニメの総集編を劇場アニメ映画として公開にこぎつけるという、その後のアニメ映画の主流のパターンを作り上げることとなった。

物語の内容が戦争である以上、もちろん敵も味方も数多く死んでいく。第1話からアムロの幼馴染（おさなじみ）である少女フラウが、戦闘に巻き込まれて目の前で家族を全員喪（うしな）うという体験をし、アムロもその死を目撃する。その死に様が非常にリアルで、近しい人の死を受け止める主要キャラクターたちの悲しみもまた深刻である。

アムロは、親しい人物の死を目の当たりにし続けることで、「ニュータイプ」としての進化を続けていく、という流れになる。これはその後の「ガンダム」シリーズの定型パターンとなるのだが、富野監督が直接演出する他のアニメ作品でも踏襲される。この辺りは、若い頃に作ったアニメ『海のトリトン』から一貫して変わらない、富野アニメの特徴である。

富野アニメだからできた衝撃的な残虐描写

「ガンダム」シリーズと並行して作られた、富野アニメの代表作の1つ、『伝説巨神イデオン』（1980年～）についても触れておく。

本作は、『機動戦士ガンダム』よりももっとのちの時代、銀河より遠い宇宙に人類が植民している世界の物語だ。遺跡の星で発掘した謎のメカをめぐって、異星人とファーストコンタクトをするが、ささいな誤解から戦闘状態となり、そのまま両方の人類同士の星間戦争へ発展してしまう。遺跡から発掘されたメカは「イデオン」と名付けられ、不思議な力を発揮して主人公たちをたびたび救う。その力は、徐々に人類や異星人よりも高度な存在であることを示し始め、両者は謎のイデという存在に翻弄されていく。

テレビアニメ版は、例によって視聴率が振るわず打ち切りになってしまった。だがその総集編と新作を合わせて公開された劇場版映画『THE IDEON』（1982年）、特に後編の『発動篇』においては、最後に主要キャラが全員死ぬという衝撃の展開を見せる。その死に様がまたむごいのだ。ヒロインの1人が顔面に銃弾を何発も受けて

死んだり、幼児キャラの頭部が吹き飛ばされるなど、これでもかというほどの残虐描写である。

原作の残虐さを忠実に再現した名作アニメ

富野アニメ以外のアニメ作品についても、少し例を挙げてみよう。80年代を代表する作品の1つである『北斗の拳』（1984年～）は、敵が毎回体を破裂させて死ぬ描写の繰り返しだ。主人公のケンシロウ自身も毎回血まみれになりながら戦うし、ライバルたちも激闘の中で血みどろになっていく。

物語は、アクション映画『マッドマックス2』[*7]に描かれたような、核戦争後の地球らしき暴力の支配する荒れ果てた世界で、拳法の達人たちが互いに闘い合い、時に友情や愛を育みながら生きていく。ケンシロウは、古来伝承された暗殺のための拳法「北斗神拳」の一子相伝の伝承者として、さまざまな拳法を使うライバルたちとの戦いを勝ち抜いていく物語だ。

テレビアニメ版は、少年ジャンプに連載されていた原作の描写をかなり忠実にアニ

＊7 1981年に公開されたオーストラリアの映画作品。『北斗の拳』をはじめとする多くのバイオレンスアクション作品に影響を与えたとされている。

メ化している。だが、さすがに体が爆発するような場面は、巧みに光などの描写でごまかしていた。そのテレビ版を再編集して別解釈の物語にした劇場映画版も公開されたが、こちらはテレビではできない残虐描写をもっとリアルに描いており、人気を博した。

以上のような、過激暴力シーンの多発する作品、特にテレビアニメ版はその後の時代の作品と違って、夕方やゴールデンタイムに普通にテレビ放送されていたのだ。ちなみに、この当時、筆者はちょうど十代だったのだが、家族で食卓を囲みながら、アニメの過激シーンを平然と視聴していた記憶がある。時代の違いとしか言いようがない。

オタクが白い目で見られるようになった理由

アニメにおける性描写にも同様のことが言える。80年代のテレビアニメは、その後のような厳しい規制がまだなく、性描写もかなり過激だった。最大の特徴は、アニメ

の女性キャラクターの裸体、特に乳首まで隠されることなく描かれていたことだ。

アニメの過激な性描写は、70年代にすでに『ルパン三世』や『キューティーハニー』など、世間に物議を醸したものもあった。それでも大して規制されることはなく、80年代にテレビアニメ視聴者の年齢が青年層まで上がったこともあって、もっと露骨になっていった。キャラ同士のキスシーンなどは当たり前で、セックス描写の一歩手前まで描かれることもあった。

80年代アニメを代表するような作品でも、そういう例は多い。あだち充の『タッチ』では、主人公・達也とヒロイン・南のキスシーンが青春を描いた名シーンとして広く知られている。

今でもシリーズが続いているＳＦアニメ『超時空要塞マクロス』（１９８２年～）でも、数多くのキスシーンが描かれている。物語は地球を侵略する謎の巨大人類との戦争であり、巨大人類は男女で互いに戦闘を続けているという奇妙な状況だ。そんな中、主役の男女カップルが目の前でキスする姿に、巨人たちは動揺し、物語を大きく左右する展開になる。

高橋留美子の『うる星やつら』（1978年連載開始、アニメ放送1981年～）では、マンガでもアニメ版でもセクハラシーンが毎回のようにあった。同じ作者の『めぞん一刻』（1980年連載開始、アニメ放送1986年～）では、キャラ同士のラブシーンもあったくらいである。

また、意外にものちにジブリアニメと呼ばれる宮崎駿監督作品でもかなりきわどい描写があった。児童も視聴する前提のアニメ映画でありながら、逆に青少年のファンがきわどいシーンに熱中したりする傾向があった。

今となってはとんでもない話だと思われそうだが、宮崎アニメの代表作『風の谷のナウシカ』（1984年）で、ヒロインの「ナウシカがパンツを履いていない」説、というのが映画公開当時、青少年のアニメファンの間で盛んに語られたものだ。

このように、80年代アニメでは時代背景も相まって、死の描写や暴力描写、性描写が過激さを増していった。そこに起こった「宮崎勤事件」がアニメの描写に冷水を浴びせかけることとなる。幼女連続誘拐殺人事件の犯人である宮崎勤が、自室にアニメ

などのビデオをぎっしり積み上げていたという報道のイメージから、アニメファンに対する世間の目線は一転して厳しく冷たいものとなったのだ。

青少年がアニメを観ていること自体、恥ずかしい趣味だと思われるほどに偏見がまかり通り、アニメファンは非常に肩身の狭い立場になってしまった。世間では、テレビアニメやマンガに対して、表現規制を強めようとする動きも起きた。

だが、そういう風潮への反動としてなのだろうか、１９９０年代に入ってからのテレビアニメや当時多く制作されたＯＶＡ（オリジナル・ビデオ・アニメ）作品で、表現がますます過激になっていったのは皮肉と言うべきだろう。過激な描写が頻出するテレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』が夕方の時間帯にテレビ放送されていたのも、今から考えるとまだまだ時代が緩やかだったように思えるのだ。